



分科会 3 地域医療連携、さらなる展開を考える

10月7日(日) 15:00～17:30 第3会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター 4F 41会議室)

W-03-04

岐阜県における薬業連携の取り組み

- 地域ぐるみの薬業連携を目指して -

えんどう ひではる
遠藤 秀治

岐阜県総合医療センター薬剤センター

「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」(医政発 0430 第 1 号)が厚生労働省医政局長から発せられるなど病院内では医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進が活発に行われている。病院の外でも施設間の連携が活発に行われつつある。こうした状況下でありながら、薬剤師間の連携は、まだまだほんの限られた地域・場面でしか実施されていないのが現状である。薬業連携が叫ばれ久しいが未だに持参薬のチェックという持参という言葉に惑わされて、持参された薬を調べることで勘違いしている。大切なことは、その患者さんの最新の薬物療法の確認、過去の副作用歴の確認そしてアレルギー歴の確認であり薬歴の活用である。それは、保険薬局薬剤師と病院薬剤師が患者の薬物療法に関する情報を相互に提供し、円滑な連携関係を構築することにより、医療安全の確保に資するという薬業連携の目的を考えて頂ければお判りいただけると思う。

我々岐阜県薬剤師会(岐阜県薬)は、連携ルールの整備などで多少体制構築は難しくなるが、「地域ぐるみの薬業連携(地域の薬剤師会単位以上のできる限り広範囲での患者を限定しないやり方の連携)」が望ましいと考え体制作りを進めてきた。岐阜県の薬業連携は平成 19 年に岐阜地区、下呂地区が岐阜県薬の薬業連携推進モデル事業地区として指定されたのに始まる。その後、平成 20 年 1～2 月に「日本薬剤師会 平成 19 年度医療安全のための保険薬局薬剤師と病院薬剤師の連携推進事業」を下呂地区で実施し、この成果を基に運用の指針を定め、岐阜県薬・岐阜県病院薬剤師会双方の委員による薬業連携ワーキンググループを設け県下全地区で均質な薬業連携が行えるよう体制整備を行った。その結果下呂地区、岐阜地区のほか、高山地区、東濃地区並びに中濃地区などで地域の特性に合わせた薬業連携が展開されている。

岐阜地区では、平成 22 年 2 月から先行の岐阜県総合医療センター(当センター)に岐阜市内の岐阜大学医学部附属病院、岐阜市民病院を加えた 600 床規模の三病院での薬業連携を開始した。平成 22 年 12 月からは経口抗がん剤の適正使用をテーマにして取り組んでいる。また、岐阜地域の薬剤師同士のコミュニケーション確立のため岐阜市に隣接する各務原、羽島、瑞穂、山県地域との合同研修会も 2 ヶ月に 1 回のペースで平成 23 年 8 月から開催している。当センターでは、この 6 月から入院時持参薬確認の一環として、かかりつけ薬局、かかりつけ医に FAX による「入院予定患者さんの薬歴提供依頼」を開始した。現在、日々 20 件程度提供依頼している。

医薬品の適正使用は、患者側、医療関係者(医師・歯科医師・薬剤師)の良好な協力が必要であり、当然、薬業連携の構築には医師・歯科医師との連携も視野に入れたものでなければならない。岐阜県ではこれらのことを踏まえ平成 20 年度から始まる岐阜県の第 5 期保健医療計画に「薬業連携」が採択されている。施策の基本となる保健医療計画に「薬業連携」があったので、これまで行政、医師会、歯科医師会と協同歩調で薬業連携が進められ大いに有効であったと感じる。下呂でモデル事業に携わって 5 年過ぎた。ちょうど今、保健医療計画の 5 年ごとの更新時期にあたっている。しかも、この四月には「病棟薬剤業務実施加算」が新設されて病院薬剤師側での体制整備の基盤ができた時期なので、地域の体制整備にはまたとない好機である。是非、各都道府県薬剤師会で行政当局に保健医療計画への薬業連携の収載を働きかけしていただきたい。

薬業連携の起源は…と考えたことがあるが、院外処方せんの発行によって薬業連携の必要性が出てきたことは紛れもない事実であり、そう古い話ではないと思う。もっと早く、院外処方せん発行と同時に薬業連携まで知恵をめぐらしていれば、薬剤師の社会的状況は変わっていたのかも知れない。

かつて私は病院のコンピュータ開発に携わっていた。我が国の病院 IT 化はそれぞれで開発を競い合ったため、個々の完成度は高いが標準化が無視されたので全体ではネットワーク化のできないシステムとなってしまった。今、同様のことが薬業連携、地域連携パスで起きないかと危惧している。最近「いつでも、どこでも、誰とでも」を合言葉にしているが、それは、患者さんがいつでも日本のどこの薬局・病院に行っても薬剤師から同じサービスが受けられること。さらに、薬剤師が医薬品の適正使用のため医療連携として医師・歯科医師と積極的な連携をして職能を発揮していることを願ってのことである。今後、益々高齢化が進むと複数化受診などで地域ぐるみの薬業連携の必要性は高まると思う。もしかすると薬業連携の進展・展開が薬剤師の将来の鍵かもしれない…。